



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 78, 1-24
Issue Date	1989-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66475
Type	periodical
File Information	yuin78.pdf



[Instructions for use](#)



目次

○某日感想 附属図書館長 近藤潤一… 1	○資料紹介：特別図書購入費で購入した図書 本学教官著作物(受贈分) ……15
○思い出のいくつか 触媒化学研究センター長 (前附属図書館長) 大野公男… 6	○ニュース・お知らせ…17
○北大蔵書の廻及入力について 廻及入力班… 7	○会 議…20
○MLA 総会と米国医学図書館視記歩記 医学部図書整理掛 佐々木光子… 8	○規 程 等 「書誌・所在情報の取扱いに関する要項」 図書館委員会委員名簿…22
○昭和63年度図書館統計…18	○人事往来…23

某 日 感 想

附属図書館長 近 藤 潤 一

<会えずじまいの課長>

近く東京工業大学から、前の学術情報課長だった山田常雄さんの追悼文集が出るそうである。生前は存じあげなかったが、今でもふっと館長室のドアを排して〈はじめまして〉とお顔を出してくれそうな気がする。なにしろ、館内には、いや全学には、北海道大学図書館オンラインシステム、愛称 CLARK という山田さんの血が、今でも駆けめぐっているのだから。

山田さんに傾倒しているひとは、後任者の益田情報システム課長である。システム課へぶらりと出かけて質問したり、風雅な草花談議を交わしたりするが、窓ごしに廻及入力ルームをのぞくと、たちまち襟を正したくなる思いに襲われる。ホスト・コンピューター ACOS610 MODEL10の稼動する低い電響もさることとして、室内は15台の端末に打ちこんでいる女性群の、咳ひとつ聞こえない緊迫した空気が満ちている。ここではいま、刻々と、本学図書資料についてその書誌情報・所在情報が学術情報センターのデータベースに登録され、同時にそのレコードがそのまま北海道大学のデータベースに取り込まれ、貴重な情報資源が形成されつつあるのだ。

これは、学術情報センターとの接続プログラムでは Case 2 といわれるシステムである。その上、これらの情報の検索は、利用者にとってきわめて簡単な手順で済む。実際わたくしも

何度か閲覧室へ行って、実際に検索してみようと思ったが、いつ行っても学生諸君が端末に向かっていて、なかなかあきがない。この方は教養部の辞書資料室の1台を使って、発注図書の重複を避けるべく、マニュアルどおりに操作してみて、やっぱりヒットしなくて、安心したような、妙に索然としたような気分を味わっただけである。しかし教養分館を訪れたときも、新入生諸君がすぐに検索方法をのみこんで、ほとんど遊び感覚で端末をいじるのを実見しているので、CLARK はさすがだとあらためて感嘆したことだった。先日も全国国立大学図書館協議会総会で、日米大学図書館会議に出席した方方がアメリカの利用者教育の先進性を強調していたが、事、検索に関しては、本学は格別の利用者教育を必要としないシステムを、国際的水準で言ってもいちばやく完成させていたのである。その先頭に立って阿修羅のように奮闘したのが、当時の山田課長だったという。

当時、図書館業務の電算化というと、図書の受け入れ、会計事務、貸出業務などの日常的な仕事が主対象とされていた。〈業界〉語ではハウス・キーピングという。(わたくしは最初家政学の術語かと思い、家政婦・執事・料理人などの連想から、ついある種の推理小説を思い浮かべてしまったが、そのときそんなことを口走って館員諸賢の失笑を買わずによかったと思っている)。そんな大勢を向こうにまわし、断然、今後は学術情報流通システム構築の潮流に立ち、あくまでも利用者優先原則をつらぬくようなオンラインシステムの確立が本筋であり、それができたならば、ほとんどが図書についての情報にかかわっている図書館ハウスキーピングもまたその効用を受けて合理化される、と主張した山田さんは、言ってみれば孤立無援の斬新なコンセプトで CLARK の開発に取り組んだのだった。故人をよく知る似鳥情報管理課長によれば、山田さんは妥協を知らぬ熱情と行動と意志の人だったようである。館側と、NEC のシステム・エンジニアたちとの夜も昼もない共同開発によって、北方式は、その後四十数館のモデルとして導入されている。この先見性に富む苦心の開発は、今でもまだ図書館全体のものの方という面で、かならずしも十分の理解を得られていないような空気も感じないわけではない。預言者の栄光というべきか。

〈先発館・先見性〉

ハウス・キーピングの合理化はついて来る、と言ったが、実際にはこの方面でも北海道大学は先発館である。学内ではだれも不思議に思わぬかとも思うが、現在、カレントの100%、全点入力を遂行している大学図書館は、微々たる数である。北海道大学は全部局を通じて全点入力を実現している。それについては全学協力体制の維持が大きくものを言っている。

各部局図書館・室を一巡りさせてもらったが、部局間の較差は一驚にあたいするものであった。電動集密書架をフルに利用しても床積みするほかない図書室もあれば、肝心の床自体がひび割れ寸前で、レファレンス業務どころか閲覧空間も保証しがたい図書室もある。そうかと思えば各種外部データベースの検索体制を整え、情報検索サービスを単独で備えているような部局もある。そこに配置された図書系職員は、高度の専門性と熟練度を要求されながら、同時に各部局長・図書委員会、事務(部)長の指揮監督下にある。それぞれの部局図書業務で手いっぱいであるところを、全学で足並みをそろえる心意気がうれしいのである。ことに遡及入力など、非常勤職員の入力班には、本館に出向し、指導に当たってもらっている。つまり、本館の図書館委員会の議決にそって、全学共通の情報資源形成に参加してもらっている。単一部局の利害を越えて協力するのが全学図書系職員の義務といえればそれまでだが、それぞれの職場に余分の負担を及ぼすのは心苦しいことである。それでも文句ひとつ、わたくしの耳に入らぬのは、実際にはないのか、あっても表面化しただけなのか、大概愛らしくない御託が並べられるのが

世の常なのだが、ともかくありがたいことである。

話が遅れたが、全学協力体制とともに触れようと思っていたのは、大野公男前館長の卓越した先見性と指導力についてであった。この、あくまでもノーブルで柔和な前館長は、同時にきわめて高潔な使命感のもちぬしであられ、酒は一滴もたしなまれず、さればこそ並み居る競争相手を薙ぎ払って美貌の令夫人を獲得され、鴛鴦物理学者として人の羨むご家庭を…ということはさておき、奇しくも山田課長の赴任と同時に館長に就任され、専用電算機の選定導入から CLARK の構築全過程を指揮された。先生はまた日本物理学会会長として学術審議会で活躍され、学術情報ネットワークの重要性を説き、学術情報センターの発足とその行政目標の策定に貢献された。いってみれば「学術情報元年」を領導し、体現されたおひとりである。そのお立場で、全学 100 台端末体制（北海道教育大学各分館も併せると 112 台）を準備し、うち 15 台を週及入力専用機として一室に集中配備された。それだけの体制が完備していたからこそ、NC も週及入力の協力を求め、いわゆる第一期週及入力五箇年計画がスタートできたのであった。

わたくしは、この間の大野館長と山田課長の出逢いを、運命的なまでに壮烈な邂逅として羨望するものである。（ここまで書いた所に、いま藤島隆学術情報掛長が、図書館の同人誌『北の文庫』15号を持参して、わたくしにくれていった。見ると山田常雄氏の追悼特集号である。巻頭に大野先生も執筆しておられる。ちょっと因縁を感じた。ついでながら、全学の教官は、図書館研究同人誌が私費で刊行されつづけていることを知らない方が多い。それにしても自然科学者に名文家が多いのはなぜだろう）。

個別図書館のデータベース形成・蔵書検索のオンラインシステム化、キャンパス LAN、高速デジタル回線網による学術情報ネットワークの敷設は、目下のところ大学図書館情報化の三点セットであるだろう。その上で ILL、いわゆる図書館間相互貸借が絡みついてくる。キャンパス LAN の方は今年度から HI NES が着工第一年次を迎え、学術情報ネットワークの方も、学情 VAN を利用した高速フォクシミリ Group 4 機が導入され、当然北海道大学は地区センター館としてノード館の機能を担うことになった。いわば先発館として最先端に立っているわけである。この構想を具体化し、実現に持ちこんだ前館長のご功績は、いくら声を大にしていってもたりないくらいである。だって、あとめぼしい課題は、なんにも残っていないではないか。道理で、わたくしのような図書館情報学だの、情報処理だのに完璧に無知な人間が、しばしの間、館長室をおあずかりすることになるはずだ。

<低次元の問題、しかし現実の問題>

そういう意味からすれば、わたくしの役廻りは、うんと実際的な落穂ひろいに徹するというあたりか。まずは閑雅なる、と言いたいところであるが、実は無益無用、ありていに言えばいささか孤独な館長室の毎日である。

かといって、問題がないわけではむろんない。学術情報センターとの密結合型接続システムによって全国図書総合目録 DB の分担作成・高度な品質の維持管理に貢献することは永続的な課題である。学術情報センターはまた、NACSIS-CAT による書誌情報の提供にとどまらず、NACSI S I R NACSIS-MALE によって学術情報そのものの国際的ネットワークの構築を指向している。

先日もその一環として全文データベース・サービスの講習・懇談会があった。画面からも、プリンターからも、論文が流れだしてくる。〈邦文も出してよ〉と言ったら、〈……前節では、入射直線偏光によって生ずるラマン散乱強度を取り扱ったが、蛍光法〈13〉の場合と同様、入射、散乱過程の複屈折効果を……〉などと、わたくしには外国語同様の文章がするする出てき

た。集積回路技術だかなんだかわからないが、先端技術の発達は、研究支援体制を一変させつつある。CD-ROMなどのハイパーテキスト、ハイパーメディアの導入なども今から検討しておかなければならない。本学にはまだ1台だが、NC試作の学術雑誌総合目録3冊分が、まことにコンパクトな一枚の光学記録媒体に納まって、自在な検索に堪える実態を見ていると、これからずいぶん多くの研究プロジェクトがCD-ROM化されて報告される時代が来そうである。

しかし、足もとの問題もまだまだこれからである。週及入力第II期計画の準備・企画も必要。ことに人文・社会系ではすくなくとも1945年まで遡らねばなるまい。HINES利用についても、無手順端末でパソコンによる情報送受などの具体的運用体制を整える必要がある。

もっと現実的な問題は、当然、人員と空間の問題である。本学はなぜか(というのは分折が面倒だから省略するという意味だが)今のところ図書館職員に欠員はない。しかし全国の大学図書館は、地方へ行くほど慢性的かつ深刻に定員内職員の欠員に悩んでいて、それは有資格者の大都市指向などと言われていたが、今や東京大学にもその波が及んで、図書館職員の確保は全国的に大問題となっている。そのための運動も行われているが、要は、大学図書館の地位低下と、専門的職能人に対する待遇の低さに要因があるのだし、それ以前に<読書>とか<書物>とかに対する関心の低下現象が伏在しているのだらうから、問題は一朝一夕でかたづくというものではない。情報化社会は言語文化財の享受・継承面では罪作りな役目を果たしている。

<図書館再開発のこと>

それに対して<空間>の方は現下の急務というべき切実な問題である。先般、図書館委員会でも報告させていただいたのだが、将来計画に関して、理系分館検討委員会がおまとめになった「北海道大学図書館理系分館設立計画案」がすでに報告了承されている。このプランは十分尊重され、推進されねばならぬことはもちろんであるが、そのために越えねばならぬ障害がいくつかある。全学将来計画専門委員会による北キャンパス再開発構想の策定もまだだし、教養部問題も、臨教審から大学審議会では先行き不透明、というよりも逆風が吹いてきている。教養部は解体か、学部への組織がえを迫られる可能性が出てきている。それに対して、学院化構想絡みで見直された新たな全学的合意はまだ形成されていない。となると、教養分館機能の強化と複合した理系分館構想は、その基盤がゆらぐ可能性もあることになる。

わが本館は16,954平方メートルという、たぶん国立大学では二番目の大きな建物である。しかし、当初教養部教官研究棟の名目で建築したらしい事情もあって、積層書庫部分が中央にあって、周囲をぐるりと各室が取り巻く格好になっている。そのため図書収容容量が案外小さく、1984年の増築時にも、当時の東見館長は「現在の増加率からみて昭和67年くらいまではもつと推定」(『榆蔭』62号)しておられる。それだとあと3年である。実際のところ過密な収納であと5年が限度、それも目下、経済学部図書館統合実施委員会の検討が詰めに入っているから、部分統合開始となるともっと短縮される。足もとに火がついている状態なのである。そうなれば、京都大学や名古屋大学などのように旧年度の利用頻度の低いバックナンバーなどを半地下収納庫に移すなり、なんんりの改修計画が必要だし、第一、理系分館に必要な基準面積も、改修計画の裏づけがないと割り出すのが困難である。

それで今年度は、斎藤現太郎事務部長の諮問で館内事務連絡会議の中に、図書館本館再開発を課題とする5名構成のプロジェクトチームを編成、今年度末を目標にプランニングを進めている。

ここでは書庫の拡充問題に限らず、利用者の利便、事務機構の効率化・集中化等も含めて、5年先には実現することを見込んで、3課1フロアの統合、統一カウンターの設置、利用者の

休憩・討議用空間の新設，等等が熱心に検討されている。いずれ見直し案の骨子がまとまったらそれにもとづいてやがて図書館委員会のご審議を仰ぐことになるだろう。ライブラリアンは仕事熱心で誇り高い人が少なくないから，妥協を知らぬ激論も交わされている模様である。

そんなわけで，理系分館設置案のいっそうの具体化，早期実現は，わたくしも熱望しているが，今しばらくは順風満帆という状態にはないということをお話ねばならないのは，まことに残念なことである。

<変わる図書館・変わってはならぬ図書館>

国大図協総会の閉会式で，当番館の弘前大学東義郎館長が挨拶された。その中で，〈図書館には激しく変わってゆく部分と，変わってはならない部分があると思うのでございます。〉と仰いだされたとき，わたくしは〈まったくそのとおり〉と声をかけたい気分であった。文献は単なる情報媒体ではない。学問の〈知〉はたしかに人類共通の資源であるけれどもほんとうの〈知〉は単なる情報の蓄積・生産を超え，その人間の生き方や，人格やと結合して発光し得るもの，そこには高貴な学芸愛が開花し，知識が魂の糧となり，人類の叡知に高められてゆく過程が内包されていなければならない。人間存在のすべてを賭けて書き手と格闘し，突然，視界が一変し，全世界が氷結し，あるいは変色する，そのなかで精神は天上に飛翔し，あるいは奈落に転落する。そんな〈読書〉という主体的経験を保証する学術愛の中心として，図書館は威厳をもって存在しつづけなければならない。図書館はどこか風変わりな，超越的で，ちょっぴり偏屈な人や，仙人のようなライブラリアン集団ということで煙たがられたり，敬遠されたりする一面もあるようだが，そしてそのなかでいちばん奇妙で無知で時代遅れの人間がわたくしであるらしいとは，つとに自覚しているところだが，それでも図書館は厳然として研究教育支援体制の守護神であるとともに，大学行政全般に，学術の尊厳をもって肅然と相対し，ときに忠告者，ときに批判者として立ち現れる使命を負う。それは単なる奉仕者として奴隷視されるべき役割でもないし，一元的に，情報・管理・資源・利用・奉仕というようなキーワードの系列が示す価値観に埋没してしまうべきものでもない。つねづねそう考えているわたくしは，それだから東館長の発話を，わが意を得た思いで迎えたのだった。

東館長は，つづけて「偉大なる真実は大いなる静寂から生まれると申します。大学図書館はこの大いなる静寂の環境を維持している空間であります。」という趣旨のことばを連ねられて，話はさりげなく環境論に移った。それにもむろん同意する。静寂というばかりではない。わが図書館には学内外の作家による美術品も，もっと所蔵され，展示されてよい。めぼしい芸術品は百年記念館に供出して，あとは寥寥たるものである。閑雅？な館長は，いちじつ，今田敬一名誉教授の F 10 の油彩画をクリーニングした。木田金次郎画伯の F 50 の遺作は，これはプロに依頼した。学内有力のみなさんによって，館内が芸術の殿堂でもあってくれれば，と思ったりもするのである。

思い出のいくつか

前附属図書館長 大野 公 男 (触媒化学研究センター長)

僅か3カ月前に退任したばかりなのに「思い出」とは大げさと思われるかも知れないが私には実感である。

1985年4月に館長に就任した際には、あれこれと考えている暇もなかった。図書館電算化という大仕事が目の前に控えていたからである。東館長時代に作っていただいていた機種選定委員会の第1回が開かれたのが4月3日と記憶する。故山田常雄学術情報課長が札幌に着いたのもその日で、挨拶もそこそこに共に委員会に出席した。

山田課長が北大図書館システムの今日を築き上げた最大の功労者であることは、当時を知る者の等しく認めるところであろう。その山田さんが北大の学情課長として来られるようになったのは、松川事務部長のお蔭らしい。松川部長は、複数の候補者の中から山田さんを迎えることに成功したという。大した眼力だと思って驚嘆したが、その後図書館専門職員がお互いに良く知りあっているのを知るに及んで成程と思う点があった。山田さんがいかに素晴らしい人であり、彼が設計・実施の中心となった CLARK が、どんなに控え目に言っても、その完成時点でいかに飛び抜けた性能を発揮したかは知る人ぞ知るの一語に尽きる。私自身のなしたたった一つの CLARK への貢献は、端末数は多ければ多いほどよいと山田さんを激励したことだけである。当初の計画は多分60台だったかと思う。算定の根拠はと聞いたら、規模の小さい部局図書室は学外からの示唆による一定の基準で外したということだった。データの悉皆性という点から考えて、システムの性能が許すかぎり、かつメーカーが応じてくれる限り、多い方がよいのではないかというのが激励の内容である。

もう一つ思い出として、中央館(正式な名称ではないが)が、文系4学部の研究・教育図書館としての機能を兼ねるという構想への動きがある。古い文書を調べてみると、この構想は今村館長の書かれたものなどに明確に残っているが、図書館委員会で審議したという記録はみつからなかった。そこで図書館の将来計画に関して、小委員会で中間報告(案)を練っていただき、図書館委員会での審議の上これが了承された。その中に上記の点が盛り込まれている。法学部との図書業務の統合は10余年前に行われていたが、昨1988年になって経済学部との間で基本的な方針で合意が成立し、遠くない時点で、統合への歩みを実現する運びとなった。その形態は法学部のいわば完全統合と異なっているが、これが本学図書館の将来あるべき姿への第一歩であってほしいと念願している。この統合の問題については、もともと図書館側は受けて立つべき立場である。今回の経済学部との合意についても、所學部長、石坂図書館委員、その他の学部側の御努力が主な原動力となって成立したものであるが、話し合いの一方の責任者として、10余年のブランクを経ての動きの具体化に一種の感慨を禁じ得ない。

図書館と直接の関係はないが、館長在任中起きたこととしては、北大の LAN (HINES) 建設計画がある。4年前の暮のある日、松川部長と3課長(うち1人は途中退席)に夜までつき合って貰ったことがある。問題は LAN の概算要求の世話部局をどこが引き受けるかということで、秋頃の段階で図書館はやらなくてもよいという見込を私が伝えていたこともあり、また図書館電算化の成否に全力を注いでいた時期でもあって、幹部諸公の図書館は引き受けられないという主張は十分理由のあるものであった。その一方、世話部局がないということで大学全体

としての基盤整備の概算要求が事実上できないという事態は避けなければならない。結果的には木下工学部長と横山経理課長に救われて、私は史上最短命の図書館長(事務取扱を除く)となることを免れたのである。

このようなよしなしごとを綴っているときりがない。館長在任中にお世話になった学内・学外の極めて多くの方に心からお礼を申し上げてペンを置くことにしたい。

北大蔵書の遡及入力について

遡 及 入 力 班 (宇野弘純: システム課図書館専門員)

〈経緯〉 昭和61年3月に図書館システムが稼働し、同年4月以降の蔵書データはほぼ全て入力する体制となりました。加えて、雑誌については以前のも含めてほぼ全誌名を初期データとして入力しました。こうしてスタートしたCLARK検索システムは頻繁に使われるようになり、その便利さが改めて認識され、まもなく従来のカードの目録の分もオンラインで検索できるようにしてほしいという要望が興ってきました。

昭和61年12月の第130回全学図書館委員会において「遡及入力事業」を概算要求することが決められました。データ蓄積の重要性は学術情報センターも強く認識していたところで、当時唯一有効なオンライン入力システムを持っていた北大はセンターの遡及入力事業に協力する体制をとることが出来ました。学内的には昭和61年度から「第1期遡及入力計画」として入力を開始しました。

〈現況〉 附属図書館システム研修室で15台の端末を使用して、学術情報センター全国共同図書目録に登録すると同時に北大蔵書データベースにも取り込むという作業が行われています。「第1期」の入力対象は、主として1970年以降発刊の図書としました。その理由は、利用頻度が高いことと学術情報センターに書誌データがあるものが多く入力しやすいためです。当初、5年を要すると考えられていましたが、学情データの飛躍的な増加や効率的なケース2プログラム開発等によって4年で達成できる見通しです。平成3年3月には北大図書データベースは70万冊以上になります。

実績は、昭和62年度	95,601冊	おもに図書館、法学部の図書
昭和63年度	168,474冊	おもに文系部局の図書
平成元年度	150,000冊(予定)	おもに自然系部局の図書
平成2年度	150,000冊(予定)	〃 〃

〈今後〉 当然第2期以降も想定しています。具体的計画とはなっていませんが入力対象資料として、学術情報センターが逆年代順に整備していく参照データに対応するもの、全国共同利用特別コレクションの入力などが考えられます。

優れた機能と豊富なデータが良い検索システムの要件です。幸いにして北大は画期的な図書館システムを持つことが出来ました。手持ちのパソコンからCLARK検索を利用できるシステムも開発されます。必要とする資料が北大の何処にあるかを、あるいは思いがけない資料が身近にあることを、居ながらにして知ることができるようになるでしょう。あとはどれだけ多く有効なデータを入力するかです。現在のような大がかりのプロジェクトがとれないにしても、「遡及入力」は今後とも全学的事業として継続してほしいと思います。

Library

Library

MLA 総会と米国医学図書館視記歩記

医学部図書整理掛 佐々木 光子

ボストンで開催された米国医学図書館協会 (MLA) 第 89 回年次総会 (以下総会と略) への参加旅行中、いくつかの図書館を訪ねる機会を得たので、総会の様子と合わせてここに印象を記したい。

総会参加者は約 1,850 名、米国外からの参加はカナダの 30 余名以外は数えるほどである。この度の参加旅行を企画した病院図書室研究会の方々が師と仰ぐ Dr. G. Lamb 女史の勧めで参加した 21 日のオリエンテーションではステージで自己紹介させられ緊張したものの総会の見所、分科会参加方法、Exhibits の楽しみ方などの手解き、MLA の歴史・活動のアピールもあり「参加している」との実感に紅潮。

その日の夕、ボストン公共図書館で歓迎レセプションが開かれ、1895 年開館以来の荘重な旧館と現代的新館のコンビネーション、ガッシリ古びた木製机の上に利用者検索用端末が並びそれを昔ながらの釣り鐘草型傘付ランプが照らすという妙、を楽しみ歩き回った。両館とも著名な建築家の手になる歴史的建築物でありその造形・機能、300 万冊をこす参考図書を初め 400 万冊もの蔵書を誇るなど、『丸善ライブラリーニュース』(123: 12-13, 1982. 10.) に詳しい。

翌 22 日は同行した触媒化学研究センター図書室村木あさ子氏宅に昨年の北大サマーセッション中滞在したマサチューセッツ州立大の学生 Jeff 君にハーバード大学図書館などを案内して頂いた。

23日は後に訪ねる米国国立医学図書館 (以下 NLM と略) の館長が座長を務める Daybreak Dialogues に参加。Medline をはじめ各種のデータベースの利用が増え、CD-ROM も出回り、図書館員の役割も自分自身が常に各データベースや機器の最新情報・技能を習熟しておく努力は勿論のこと、エンド・ユーザ・サーチ教育に果たす図書館の比重が大きくなってきているので、研修プランの回数を多く、開催地も都市部だけじゃダメ、On-line サービスの外にいる小規模図書室にも便宜をと発言が続き、相互の経験や工夫が交換される。

総会 Abstract を見ると“Training Physicians for the 21st-Century”の必須項目として“lifelong information seeking and management skills”教育をあげ、図書館が独自にクラス設定したり、あるいは大学のコンピュータ・センターと協力してカリキュラムにコンピュータ講義を組み込んだ実践レポートが多い。私達は、時に代行サーチは不要、ユーザ自身がオンラインで結んだデータベースに投稿し、検索し、引



ボストン公共図書館ではコンピュータとアンチックな備品が同居

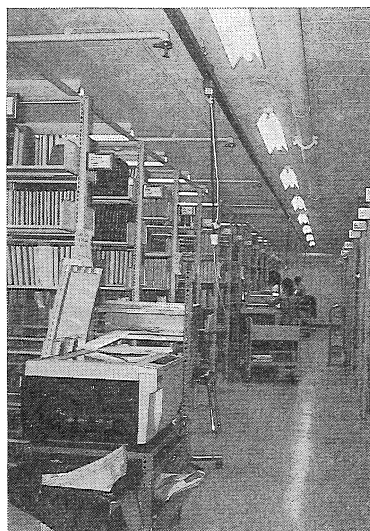
き出し…Librarian 不要の時代がくるのではなどという話になるけれど、そんな話はしてられないようである。

展示会場へ。書物というものは殆ど見当たらず、コンピュータと CD-ROM ばかりが目につく。DIALOG のほとんどのデータベースが CD-ROM 化されているとのこと。CD-ROM Medline で遊んでみる。MeSH (シソーラス) を知らない初心者でも検索出来るよう工夫されているソフト。日本国内でも今続々と利用報告が出され、北大医学部図書館にも今秋導入されることになった。

24日はニューヨークへ。午後訪ね歩いた病院図書室の一つが、The Seymour J. Phillips Health Science Library, Beth Israel Medical Center. この利用者は医師、看護婦と看護学校生の約3,000名で病院ビルの2階を占める図書室は多様なサービスを実施している。受け入れ雑誌650誌、テキスト・モノグラフ1万冊、Audiovisuals 400件、IBMとAppleのパソコンとソフトも備えている。Online 検索は朝8時から夜6時まで無料で受け付けているし、Do-it-yourself 向きには、数年分の CD-ROM Medline もあり、訪ねた時にも医師が奮闘中だった。エンド・ユーザ・サーチ教育もいつでも受け付けている。開館時間も週日朝8時-夜10時、日曜日さえ午後1-9時と聞くと、「アッチはいいよ」と北大の利用者に言われるのも仕方ないかなと思う。エンド・ユーザ検索の最初のシステム、ジョージタウン大学の提供する Mini-Medline (NLM Medline から臨床系300誌を抽出) もまた使用自由でとても評判が良いとのことであった。

夕方 コーネル大学医学部の Samuel J Wood Library を訪ねた。Woody Library のポスター通り、木の温もり溢れる内装・備品、効果的に段差を利用した立体的なデザイン、ズラリと並ぶグループミーティング室、そして何よりも閲覧・書架・事務部門のすべてにゆったりスペースが与えられ広々と気持ち良い。米国の大学医学図書館については既に報告も多く新しくは「米国医学図書館視察報告(1)-(3)」(『大阪大学図書館報』22(4), (5/6), 23(1), 1988. 12-1989. 4.) が詳しく実状を紹介している。

26日は、ワシントンの北、Bethesda の NIH (国立保健研究所) キャンパスに NLM を訪ねた。1836年創立の世界最大の医学図書館。広報部長の案内で400万件に上る資料・館内を見てあるく。視聴覚資料を扱う Learning Resource Center は最近特に医学教育との関連で力を入れており、殆どの手術のビデオテープを用意し講義用に ILL で貸し出している。雑誌書庫では書棚に沿ってコピー機が数台天井から電源を引いて並び、目的の書架の所まで移動させて使用しているのを見て、その発想に思わずニヤリとしたり、雑誌数21,000誌と聞いてため息をついたり。NLM は米国内では全米7ブロックの地域センター館、125の Resource 館(大学医学図書館)、そして4,000の地域参加館(大半が病院図書室)からなるネットワークの頂点で年200万件以上の ILL (DOCLINE) をさばっている。又、世界の医学情報提供源である、Index Medicus (1989 収載誌数2,888誌、内日本発行のもの125誌)、そのデータベースである Medline (1987, 3, 759誌、総文献数600万件、年30万件入力) も又ここで生まれる。NLM の Online サービス MEDLARS は Medline を主に23のデータベースをもち1988年の利用は、2万以上の団体・個人によって420万回にも上っている。閲覧室では先の Mini-Medline の NLM 版



NLM で、雑誌架に沿って並ぶコピー機
天井から電源をとり移動させて使用

GRATEFUL MED が利用者に解放されている。

最後に、NLM に現在3人いる日本人スタッフの一人で、Medline の Indexer, Atsuko Craft 氏を紹介され実際のデータ入力作業を見た。机の上に“RUSH”と書いたピンクのシートが挟まった雑誌が重なっている。これは手元に2日以上置いてはいけない“急ぎ”の分。1989年に入ってから、いずれの論文であれ英文のアブストラクトがついているものは100%アブストラクトも入力することになったという。日本で利用率の高い雑誌でも必ずしも収載誌とならないのは何故か？という質問には、選考の基準のなかでもその雑誌の Originality が最重要視されるからではないかとお話だった。日本人名には必ず読みをふってほしい…とか聞いているうちに、もう私の“NLM 詣で”も終了。

この旅で考えさせられたこと一

Hartford 病院図書室の男性が「Medical librarian of surgery」と自己紹介した時、私は思わず「Surgery とは研究テーマですか？」と聞き返した。答えは「自分の病院図書室では図書館員は医師と看護婦から編成される治療チームに組み込まれており回診にも必要ならオペにも参加し、受持ちの患者に必要な資料は責任をもって提供していく」とのこと。こういう観点で私に北大病院の Hospital Librarian としての自覚があったらどうか？生命を守る最前線で働いている自覚と誇りがよりよいサービス活動を作り上げてきている。MLA は基本的には個人会員からなるが、MLA Annual Report 1988/1989 を見ると、病院図書室会員 889 に比し、医学部図書館会員 240 (paid members) という数が意外に思えた謎が序々に解かれてくる。制度的にも米国の病院図書室基準（『ほすびたる・らいぶらりあん』14 特別号 1989. 4）に相当するものがなく、病院勤務医・開業医の多くが文献入手を出身医局や出入りの製薬会社に依存している日本。卒業後の医師・医療従事者への生涯教育に関して大学医学図書館と病院図書室を結ぶネットワークづくりのうごきは、1987年の日本医学図書館協会の答申もあって既にいくつかの地域ネットワークを生み出し、『医学図書館』（36(1): 15-19, 1989. 3）等々実現のための議論も盛んである。関わり方の検討を迫られる日も遠くないのではないか？ というところでこの視記歩記を終えたい。

「楡蔭」タイトル部分の募集

本誌は昭和42年に創刊され、近く80号を迎えるに至りました。平成2年3月発行予定の80号からはタイトル部分のレイアウトを新しくしたいと思います。皆様からのご応募をお待ちしています。

1. 大 き さ：印刷出来上がり、13.5 cm × 5.0 cm
2. 最小記載事項：北海道大学附属図書館報、楡蔭, Hokkaido University Library Bulletin, No. 80 May 1990
3. 色：原色2色まで（原紙はページの予定）
4. 締め切り等：平成元年10月30日（情報システム課図書館専門員宛：2564）

◆ 図書館統計 昭和 63 年度

○ 昭和 63 年度年間受入：図書冊数・雑誌種類数

区 部 分 局	図 書 受 入 冊 数							雑 誌 受 入 種 類 数						
	和 書			洋 書			合 計	和 雑 誌			洋 雑 誌			合 計
	購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他		購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他	
附属図書館	4,715	1,399	12,771	18,254	620	13,201	50,960	268	1,626	—	409	351	—	2,654
教養分館	4,031	103	516	3,056	1	108	7,815	266	228	—	220	—	—	714
文学部	2,823	174	563	5,944	541	923	10,968	132	255	2	678	1	—	1,068
教育学部	2,091	72	406	749	12	281	3,611	255	402	—	196	6	—	859
法学部	(1,971)	(263)	(798)	(2,834)	(521)	(615)	(7,002)	(121)	(301)	—	(320)	(37)	—	(779)
経済学部	1,702	112	584	1,578	11	488	4,475	148	686	1	268	35	1	1,139
理学部	307	39	148	1,203	169	1,793	3,659	109	269	1	720	340	4	1,443
医学部	460	183	548	591	44	1,207	3,033	244	482	—	714	167	—	1,607
歯学部	313	10	129	161	35	539	1,187	137	125	—	205	32	—	499
薬学部	121	19	37	94	—	592	863	35	49	—	110	5	—	199
工学部	1,557	58	1,200	987	10	2,275	6,087	343	419	2	854	95	1	1,714
農学部	1,949	56	811	818	17	1,300	4,951	464	906	9	616	266	—	2,261
獣医学部	132	11	129	145	7	413	837	32	180	—	133	144	—	489
水産学部	890	13	487	119	1	895	2,405	201	577	3	261	424	2	1,468
言語文化部	(968)	—	—	(2,806)	1	—	(3,775)	(57)	(2)	—	(108)	—	—	(167)
環境科学研究所	557	24	116	171	—	260	1,128	38	81	1	117	35	1	273
低温科学研究所	33	4	144	76	23	632	912	24	319	2	95	213	—	653
応用電気研究所	70	—	20	203	—	450	743	27	120	1	121	10	—	279
触媒化学センター	4	56	23	70	14	250	417	13	1	—	45	15	—	74
免疫化学研究所	4	—	—	31	—	255	290	13	102	1	47	—	—	163
スラブ研究センター	160	3	16	2,175	223	275	2,852	5	142	1	152	57	1	358
大型計算センター	3	—	—	115	—	126	244	35	33	2	52	—	—	122
医療技術短期大学	903	20	215	204	4	59	1,405	145	145	—	48	1	—	339
合 計	22,825	2,356	18,863	36,744	1,732	26,322	108,842	2,934	7,147	26	6,061	2,197	10	18,375

* [部局：集計単位としての部局] 附属図書館には法学部，教養分館には言語文学部，理学部には情報処理教育センターと実験動物センター，医学部には附属病院とアイシトープ総合センター，歯学部には附属病院，農学部には附属農場と附属演習林，事務局には保健管理センターの分をそれぞれ含む。以下の統計においても同じ。

* [その他] は，雑誌を製本して受入たもの，および管理替で増となったもの＝図書館の例では自然系バックナンバーのものとスラブ研からの管理替え＝がほとんどである。

○ 全学蔵書冊数

(平成元年3月31日現在)

部局	和書	洋書	合計	部局	和書	洋書	合計
附属図書館	461,692	349,784	811,476	水産学部	71,983	44,490	116,473
教養分館	112,549	63,131	175,680	教養部	15,855	8,140	23,995
文学部	88,420	112,170	200,590	言語文化部	(16,861)	(50,729)	(67,590)
教育学部	67,477	26,776	94,253	環境科学研	9,990	4,633	14,623
法学部	(62,842)	(111,742)	(174,584)	低温科学研	6,831	15,491	22,322
経済学部	58,120	45,998	104,118	応用電気研	5,389	16,128	21,517
理学部	45,151	135,701	180,852	触媒化学セ	3,090	10,331	13,421
医学部	81,842	102,757	184,599	免疫科学研	1,424	6,296	7,720
歯学部	14,165	13,700	27,865	スラブ研セ	(2,240)	(37,130)	(39,370)
薬学部	5,048	13,675	18,723		1,619	12,392	14,011
工学部	170,080	137,819	307,899	大型計算セ	883	1,477	2,360
農学部	192,611	107,098	299,709	事務局	1,824	156	1,980
獣医学部	10,122	20,221	30,343	医療短期大	17,844	2,736	20,580
合計					1,444,009	1,251,100	2,695,109

○ 昭和63年度 附属図書館利用数

(開館292日)

区分 部局		開架図書室		書庫			参考 閲覧室	北方 資料室	語学 演習室
		館外貸出		館内閲覧	館外貸出				
		人数	冊数	冊数	人数	冊数	利用者数	利用者数	利用者数
学 生 所 属 部 局	文学部	2,144	4,259	938	560	1,077	1,491	560	22
	教育学部	420	902	136	81	154	198	123	—
	法学部	2,761	5,272	552	680	1,052	455	90	31
	経済学部	953	1,835	60	87	154	614	41	44
	理学部	2,538	4,915	24	73	101	153	25	64
	医学部	227	405	2	6	9	11	13	1
	歯学部	343	737	3	—	—	51	1	—
	薬学部	391	677	7	5	5	23	2	—
	工学部	1,052	2,096	13	17	21	124	103	2
	農学部	944	1,866	10	24	37	116	48	11
	獣医学部	76	144	—	—	—	23	4	—
	水産学部	—	—	—	—	—	16	3	1
	教養部	5,708	11,424	141	232	306	475	297	69
	研究所ほか	—	—	3	—	—	108	126	—
医療短期大	378	731	4	3	4	42	2	2	

部 局	開架図書室		書 庫			参 考 閱覧室	北 方 資料室	語 学 演習室
	館 外 貸 出		館内閲覧	館 外 貸 出				
	人 数	冊 数	冊 数	人 数	冊 数	利用者数	利用者数	利用者数
院 生	2,485	5,234	368	2,281	6,687	—	—	148
教 官	773	1,615	298	1,844	3,646	—	—	15
職 員	864	1,650	13	147	314	—	—	3
学外利用者	180	369	959	331	939	434	936	—
利用者合計	22,237		1,669	6,371		4,334	2,374	413
利用冊数合計		44,131	3,531		14,506	269 ¹⁾	2,051 ²⁾	415

註 1) 国連資料・OECD資料・EC資料・図書館学資料のみ。(他の参考調査資料は貸出ししない)

2) 館外貸出冊数のみ。

3) 参考閲覧室、北方資料室の学内利用者は学生欄にまとめた。

○ 昭和 63 年度 教養分館利用数

(開館 291 日)

館外貸出・分類別

(教養分館)

部 局	開架図書室 (館外貸出)		語学演習室 (館内利用)		ビデオ視聴室 (館内利用)	
	冊 数	人 数	巻 数	人 数	巻 数	人 数
文 学 部	1,098	601	14	14	29	29
教育学部	139	65	1	1	13	13
法 学 部	396	221	8	8	21	21
経 済 学 部	438	231	5	5	23	23
理 学 部	2,207	1,270	6	6	31	31
医 学 部	481	307	55	55	23	23
歯 学 部	195	96	1	1	0	0
薬 学 部	409	227	3	3	2	2
工 学 部	1,891	1,084	48	48	64	64
農 学 部	376	223	3	3	78	78
獣医学部	259	143	2	2	12	12
水産学部	1	1	—	—	—	—
教 養 部	40,230	23,447	344	344	1,297	1,297
医療短期大	136	76	1	1	2	2
院 生	1,273	737	68	68	49	49
教 官	655	356	8	8	65	34
職 員	1,208	649	3	3	13	13
学外利用者	58	32	7	7	30	30
利用者合計	51,450	29,766	577	577	1,752	1,721

000 総 記	2,156
100 哲 学	2,290
200 宗 教	227
300 社会科学	4,239
400 語 学	595
500 純粹科学	21,538
600 応用科学	1,815
700 芸 術	1,110
800 文 学	4,297
900 地理・歴史	4,821
文庫・新書	8,292
雑 誌	70
合 計	51,450

○ 昭和 63 年度 文献複写・相互利用統計

I. 国内： 附属図書相互利用掛を經由して学外へ依頼した件数 (国立・私立とも)

申込部局	附属 図書館	文学部	法学部	教 育 部	経 済 部	理学部	医学部	歯学部	農学部	獣 医 部
件 数	4	110	463	12	3	5	3	4	37	2
申込部局	言 語 文 化 部	環 境 学	低温研	応電研	触媒研	免疫研	医 療 大			合 計
件 数	122	163	3	88	13	3	113			1,148

II. 国内： 新方式 (国立大学等図書館相互における文献複写) で各部局図書掛が受付・依頼を行った件数

部 局	附属 図書館	文	教	経	理	医	歯	薬	工	農	獣医	水産	低温	合計
受 付	2,763	270	197	141	—	1,232	—	160	1,176	1,442	338	321	156	8,196
依 頼	695	236	168	140	598	872	99	510	613	199	222	233	98	4,683

III. 国外への依頼件数 (参考調査掛)

英	米	西 独	オランダ	ソ 連	スウェーデン	フランス	オーストリア	その他	合 計
280	219	41	27	20	20	11	11	36	665

IV. 図書館間相互貸借 (相互利用掛) ○ 他館への貸出 641 冊 ○ 他館からの借用 271 冊

V. 附属図書館電子複写・マイクロ業務実績 (館内分を除く) (相互利用掛)

複写室 申込者	件 数 (件)	複写論文 点 数 (点)	処 理 枚 数 ・ コ マ 数					
			総 数	内 訳				
				電子複写 (枚)	マイクロ フィルム (コマ)	マイク ロフイ ッシュ (枚)	引伸焼付 (枚)	リーダ ー プリン ター (枚)
学 内 者	305	521	12,285	1,656	653	—	48	9,928
学 外 者	3,917	5,201	62,787	61,131	—	—	—	1,656
合 計	4,222	5,722	75,072	62,787	653	—	48	11,584

VI. 参考質問 (参考調査掛)

所在調査	書誌調査	事項調査	利用指導	情報検索	合 計
3,126	448	643	1,336	171	5,724

○ 昭和 63 年度 CLARK 統計

端 末 機 設 置		図書データベース登録数				学術情報 センター への所蔵 登録累積 (89.7.1)	雑誌データベース登録数			システムを 使用しての貸出		検索回数1台平均 ③		
部 局 名 ①	台数	年間増加	累 計		所蔵雑誌 純 誌 数		受入雑誌 延べ誌数	製本単位	研究室	一般貸出	利用者用	業務用		
		合 計	和 書	洋 書										
附属図書館	21	12,058	132,067	84,357	47,710	97,246	15,866	2,390	187,606	31,709	44,132	26,891	12,480	
週 及 入 力	15	174,201	② —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5,404	
法 学 部	1	☆	☆	☆	☆	☆	☆	848	☆	10,467		11,894		
ス ラ ブ 研	1	575	1,862	342	1,520	☆	☆	236	☆	3		4,427		
教 養 分 館	7	7,951	99,046	70,529	28,517	54,789	469	831	7,126	7,019	51,450	22,049	4,140	
教 養 部	1	△	△	△	△	△	△	△	△	4,929		208		
言 語 文 化	1	△	△	△	△	△	△	△	△	27,456		1,577		
文 学 部	6	8,024	48,523	23,241	25,282	35,303	1,958	1,075	3,041	51,588		4,560	6,526	
教 育 学 部	3	3,488	34,401	28,170	6,231	23,176	1,674	893	2,122	10,603		5,210	14,339	
経 済 学 部	4	3,193	34,346	18,761	15,585	26,543	2,475	460	3,554	37,862		9,510	13,332	
理 学 部	5	1,992	5,106	1,345	3,761	4,242	3,306	1,761	4,207	7,116		12,220	8,114	
医 学 部	5	2,503	5,096	2,753	2,343	4,080	3,960	1,907	4,696	2,513		6,918	5,104	
歯 学 部	2	442	1,255	821	434	946	488	517	0	905		2,025	2,364	
薬 学 部	2	263	641	433	208	496	327	220	1,605	292		6,326	2,955	
工 学 部	7	3,142	8,156	5,317	2,839	12,360	3,618	2,271	5,579	9,756		11,015	8,103	
農 学 部	7	2,935	7,098	5,175	1,923	14,499	3,777	1,936	3,510	8,396		11,916	7,516	
獣 医 学 部	2	290	901	442	459	748	891	489	552	747		2,223	1,235	
水 産 学 部	4	1,289	2,962	2,538	424	2,082	3,135	1,636	3,762	4,287		6,567	4,678	
環 境 科 学	1	659	1,855	1,455	400	1,515	376	327	2,711	4,392		4,327		
低 温 研	1	216	715	459	256	544	1,050	654	1,711	36		1,694		
応 電 研	1	341	341	183	158	368	307	155	1,404	299		3,415		
触 媒 研	1	83	462	44	418	417	167	75	642	39		2,426		
免 疫 研	1	55	148	34	114	51	104	65	664	157		521		
医 療 短 大	1	1,081	3,289	2,843	446	2,790	304	264	1,189	1,502		3,352		
教 育 大 学	12	13,481	13,825	12,156	1,669	—	3,135	—	—	13,835		6,827		
合 計	112 台	238,262 冊	402,095 冊	261,398 冊	140,697 冊	282,195 件	32,753誌 延べ誌数 53,195誌	19,010誌 純誌数 12,370誌	235,681 冊	235,908 冊	95,582 冊	13,879	7,877	
											5,373		総合計 1,002,927回	

注記 ①部局名＝附属図書館には大計センターの数を含む。☆欄は附属図書館に、△欄は教養分館に含まれる。スラブ研で処理した資料は附属図書館に移管される。②週及入力の累計 258,585 冊は各部局の累計に含まれる。③蔵書検索画面で検索語を入力し実行キーを押した回数。

資料紹介

○昭和 63 年度 特別図書購入費で購入した資料

国立国会図書館所蔵明治期翻訳文学書全集

第 1～2 期 1987～1988 マイクロフィルム

国立国会図書館所蔵の明治 6 年から明治 38 年までに出版された西欧文学の翻訳書を全て収録した文学全集。

Русское Слово ; Литературно-Ученый Журналь. Том. 1-8, 1859-1866.

(ロシアの言葉) マイクロフィルム

1859 年から 66 年にかけてペテルブルグで発行されたこの雑誌は、ピーサレフ、ザイツェフ等著名批評家の参加を得てツルゲーネフ、レールモントフ、プーシキン等の作品の批評を掲載し、当時の社会思想を代表する雑誌である。

**The Concordance to the Standard Edition of the Complete
Psychological Works of Sigmund Freud. 2nd ed. 1984.**

(ジークムント・フロイト心理学全集標準版用語索引)

フロイト英語標準版全集に用いられているタームのコンコーダンス。

**Verwaltungsarchiv ; Zeitschrift für Verwaltungsrecht und
Verwaltungsgerichtsbarkeit. Bd. 1-47, 1893-1942. Reprint ed.**

(行政雑誌)

1897 年に創刊されたドイツ行政学雑誌。N. ルーマン、C. H. ウレ、F. ヴェゲナー等著名な行政学者による編集。48 巻以降は法学部公法資料室で所蔵している。

Foundations of Criminal Justice.

(刑事裁判基礎文献資料集成)

全 33 点からなる本シリーズは、犯罪現象論をはじめ刑事立法、刑事司法、刑事警察、行刑学保安処分論など刑事学関係の多岐にわたる優れた研究書を網羅しており、過去の経験的な事実を負うところの大きい刑事学の研究には欠かせない基本的文献資料集である。

Entscheidungen des Preussischen Oberwaltungsgerichts.

Bd. 71-106 und Haupt-Register 1-106. 1877-1941.

(ドイツ上級行政裁判所裁判例集)

第 2 次大戦前のドイツのプロイセン州上級行政裁判所の判例集。

**Rechtsprechung der Oberlandesgerichte auf dem Gebiete
des Zivilrechts. Bd. 30-46, 1915-1928.**

(ドイツ民事裁判所裁判例集)

第 2 次大戦前のドイツ各州の上級裁判所の民事判例集。

**Jahrbuch des Deutschen Rechts. Jg. 1-32, 1904-1932
und neue Folge Jg. 1-9, 1934-1942.**

(ドイツ法律年鑑)

第2次大戦前のドイツの判例のダイジェストとその所在を記載している。対象は民法，商法，訴訟法，憲法で，事項別に編集されており件名索引もつけられている。

**Subject Catalogue of the House of Commons Parliamentary Papers,
1801-1900. Compiled by Peter Cockton. 1988.**

(19世紀英国下院議会文書主題別目録)

本目録は，19世紀英国下院議会文書を19の主題に分類，この19の主題は73の項目に，さらに全体では約630の細項目に分類されている。議会文書は，細項目毎に構成される四つの文書順に配列され，該当文書の会期年度，文書番号，会期毎の巻数と掲載ページ等が記載されている。欄外にはキーワードが表示され，主題・キーワードのいずれからでも検索できるようになっている。

**Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung. Jg. 1-13,
15, 23, 25, 1892-1917/18 und Jg. 4-5, 1924-1927. Reprint ed.**

(国民経済・社会政策・行政雑誌)

近代経済学におけるオーストリア学派の機関誌であるが，理論経済学に関する論文ばかりでなく当時のヨーロッパにおける社会，経済問題など広汎な内容についての諸論文を含んでいる。今回の購入で，当館の既蔵分とあわせると全巻号が揃ったことになる。なお，この雑誌は1921年以降 Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik と改題された。

Business Week. 1929-1983.

(週刊ビジネス)

アメリカの経済専門週刊誌でその内容は経済政策，金融，産業経営等経済全般にわたる。なお，1937～1949年の部分はマイクロフィルム版である。

Actes de la Recherche en Sciences Sociales. No. 1-65, 1975-1986.

(社会科学研究報告)

法律，経済学，政治学，宗教学，社会学，心理学，哲学，文学，歴史など人文・社会科学分野の多様な研究論文が収録されている。

○本学教官著作物(本館・分館受贈分)

[本館]

名誉教授

横道 英雄 連続体の力学 鹿島出版会 1988

石川 恒(訳) 家畜の人工受精に関する論文 Ilya Ivanovich Ivanov 著
北海道大学獣医学部家畜臨床繁殖学講座 1989

法学部

石川 武(監訳) ゲルマン法の虚像と実像 K. クレッシュェル著 創文社 1989

楡 蔭

経 済 学 部

吉 田 文 和 ハイテク汚染 岩波書店 1989

医 学 部

小 林 博 がんの予防 岩波書店 1989

応用電気研究所

荒 川 泓 水・水溶液系の構造と物性 北海道大学図書刊行会 1989

スラブ研究センター

木 村 汎(編) 元島民が語るわれらの北方四島 千島歯舞諸島居住者連盟 1988

[分 館]

医 学 部

小 林 博 がんの予防 岩波書店 1989

◆ニュース・お知らせ

○ファックスによる文献複写サービスについて (附属図書館)

附属図書館では学術情報ネットワーク(学情VAN)を利用して、下記の大学とファックスによる文献複写サービスを行っています。これによれば、短期間で鮮明な複写物を入手できます。料金は1枚90円です。くわしくは附属図書館相互利用掛(内線4095)にお問い合わせください。なお、このサービスを利用できる大学図書館(元年4月1日現在)は次のとおりです。

北海道大, 東北大学 筑波大, 東京大, 東京工業大 名古屋大 京都大, 大阪大(中之島分館) 岡山大, 九州大	山梨医科大, 東京学芸大, 電気通信大, 横浜国立大 静岡大, 浜松医科大, 愛知教育大, 名古屋工業大 豊橋技科大, 三重大, 滋賀大, 滋賀医科大 京都工繊大, 大阪外語大, 山口大, 福岡教育大 九州芸工大, 九州工業大, 佐賀医科大
--	--

○外国人留学生のための「日本関係図書」コーナーを設置

附属図書館では留学生の皆さんに日本・日本文化についてより深く理解していただくため、国際交流課の協力を得て3階開架閲覧室内に外国人留学生のための「日本関係図書」コーナーを設けました。このコーナーには、外国語(主として英語)による日本の政治、経済、文化、歴史、芸術、文学に関する概説書および辞典類を揃えてありますのでご利用ください。

また、小冊子「留学生のための図書館利用案内」を作成し各学部図書室を通じて外国人留学生全員に配布しました。この「利用案内」には、各閲覧室・学部図書室の利用方法、図書のさがし方、レファレンス・サービス、相互利用等、図書館の利用全体について日英両語で説明してあります。利用案内を有効に使って図書館を積極的に利用されるよう期待しております。

○学術情報センター主催「情報検索システムに関する利用者との懇談会」報告

去る7月6日、附属図書館会議室を会場にして上記懇談会が開催された。これは学術情報センターが全国のNACSIS-IRの利用者を対象に地区ごとに開催したものである。当日は道内の研究者や情報検索担当の図書職員等50数名が参加した。

前半に、NACSIS-IRの現状と今後のサービス予定のデータベース(法令データベース)の説明と、この4月から学術情報センターがサービスを開始した化学系学会誌掲載論文の全文データベースの検索デモが行われた。この全文データベースはファクシミリを併用すれば図

形・グラフも同時に入手できるもので、現在のところ高分子論文集・Polymer Journal・Agricultural and Biological Chemistry の3誌が対象誌になっている。法令データベースは総務庁作成のもので、政令以上の現行法令が収録され来年度から開始を予定しているとのことである。

ひきつづき行われた懇談会では農学・医学・人文社会科学系のデータベースの新規導入、簡易版マニュアルの作成、練習ファイルの提供、通信速度の高速化、国際通信網との連携の充実、気軽にさわられるような画面構成・展開など、利用者から多くの意見・質問が寄せられた。学術情報センターとしても今後とくにデータベースの充実に力を入れていきたいとのことであった。

(工学部図書閲覧掛 鷗澤和往)

* NACSIS-IR の利用等については、各部局図書室または附属図書館参考調査掛 (2973) にお問い合わせください。

○経済学部図書掛と附属図書館との統合について

経済学部教授会において同学部図書掛と附属図書館との統合が承認され、これを受けて、その後両部局で統合のための大綱について話し合いが行われた結果、これが基本的に合意されました。

また、この大綱に即して更に円滑に実施するため、両部局で構成する「経済学部図書統合実施計画委員会」を設置すると共に、第1回の委員会を本年6月23日に開催し、そこでは、統合は平成2年4月1日から3年計画で実施する等のことが合意されています。

○附属図書館事務部の掛名称の変更について

昨年4月の「課」名の変更にもない本年4月から「掛」の名称が下記のとおり変更されました。

情報管理課 「受入掛」 → 図書受入掛
「目録掛」 → 目録情報掛
「教養分館整理掛」 → 教養分館情報管理掛
情報サービス課 「閲覧掛」 → 資料サービス掛
「教養分館閲覧掛」 → 教養分館情報サービス掛

○システム部会報告

[システム管理部会]

昭和63年度第3回(平成元年1月18日)

・図書雑誌区分について

平成元年度から学術情報センターの基準を採用することとする(今後、北大では年鑑・年報類を「雑誌」として扱う)。「北大図書館システムにおける図書・雑誌の区分に関する申合せ(案)」を図書業務電算化委員会(全学図書掛長会議)に提出する。

・CLARK 検索を無手順端末から利用できるシステムの開発を早急に行うべきである。

昭和63年度第4回(平成元年3月28日)

・図書雑誌区分について

上記「申合せ」の実施にもなう実務の指針およびシステム対応の作成配布する。図書館での対応を早急に決定するよう要請する。

[図書情報システム運用部会]

昭和63年度第4回(平成元年3月23日)

・「北大図書館システムにおける図書・雑誌の区分に関する申合せ」(平成元年2月7日全学図書掛長会議)に基づく作業に関して、留意すべき事項の確認が行われた。

楡 蔭

平成元年度第1回(平成元年7月14日)

- ・システム管理部会委員の推薦
- ・校正終了処理プログラムの瑕疵は、8月中に修正される予定である。

[雑誌システム運用部会]

昭和63年度第5回(平成元年3月24日)

- ・「北大図書館システムにおける図書・雑誌の区分に関する申合せ」に基づく「図書・雑誌区分の運用にあたっての指針(案)」を検討し、承認した。

平成元年度第1回(平成元年7月4日)

- ・システム管理部委員の推薦
- ・製本処理と予算ファイルの対応について(製本DBに登録したときの材料費・製本費・登録冊数がどのように予算マスタへ反映されるか)の説明。

◆ 会 議

第141回 図書館委員会 <平成元年3月16日(木)>

(議 題)

1. 平成2年度概算要求事項について
2. 理系分館構想について
3. 北海道大学図書取扱規程の廃止に伴う「北海道大学における書誌・所在情報の取扱いに関する申合せ」に替わる要項(案)について
4. 附属図書館長の任期について

第142回 図書館委員会 <平成元年7月5日(水)>

(議 題)

1. 昭和63年度決算について
2. 平成元年度予算(案)について
3. 「北海道大学における書誌・所在情報の取扱いに関する要項」(平成元年4月19日制定)について

第97回 教養分館委員会 <平成元年4月25日(火)>

(議 題)

1. 平成元年度兼任教官指定図書の選定について
2. 平成元年度前期演習室の使用について
3. 昭和63年度教養分館図書費決算について
4. 平成元年度教養分館図書予算(案)について

第98回 教養分館委員会 <平成元年7月18日(火)>

(議 題)

1. 平成元年度参考・視聴覚資料の選定について
2. 平成元年度教養分館図書予算について
3. 平成元年度後期以降の演習室の使用時間について
4. 教官指定図書について
5. 言語文化部図書委員会との関係調整について

図書担当掛長会議 <平成元年2月7日(火)>

(議 題)

1. 北海道大学図書館資料取扱要項(案)について
2. 図書と雑誌の区分の取扱いについて

図書担当掛長会議 <平成元年5月23日(火)>

(議 題)

1. 会計検査院実地検査について
2. 遡及入力作業(平成元年度分)について

北海道地区国立大学図書館協議会 <平成元年4月21日(金)>

(議 題)

1. 「北海道地区国立大学図書館情報処理ネットワーク協議会」の在り方について
2. 「高速ファクシミリによる文献複写業務」について
3. 「第36回国立大学図書館協議会総会関係」について

第36回 図書館協議会総会

本年度の国立大学図書館協議会総会は、6月29日、30日の両日にわたって弘前大学で開催されました。(参加者等は96大学240名)主な議事等は次のとおりです。

○ 協 議 事 項

- ① 建築基準の見直しについて
- ② 保存図書館について
- ③ 図書館職員の確保について
- ④ 「現物貸借規約(案)」について

○ 研 究 集 会 テーマ：大学図書館の国際交流

第1分科会

- ① 外国人留学生のための資料整備について
- ② 外国雑誌センター館における雑誌の収集及びサービス提供に関するセンター館以外の大学の意向の把握及び反映方法について
- ③ 学生の情報検索サービス利用について
- ④ 学術情報センターの電子メールの活用について
- ⑤ 遡及入力の一層の推進方策について
- ⑥ コンピューター、AV機器を利用した図書館施設・設備の利用に係る情報提供の手段について
- ⑦ 図書資料の集中管理について
- ⑧ ファックス(特にG4)を利用した複写サービスの充実について
- ⑨ ILLシステムについて
- ⑩ 資料の保存について(第4回日米大学図書館会議)

第2分科会

- ① コンピューターのリプレースについて
- ② 学術情報システムへの書誌・所蔵データの遡及入力促進について
- ③ 学術情報システム高速デジタル網(＝学術情報ネットワーク)の各都道府県への拡張について
- ④ 図書館職員の公務員試験合格者枠の拡大について
- ⑤ 図書館資料購入費の安定的増額について
- ⑥ 学術情報システムに対応する情報処理要員の確保と養成
- ⑦ ニューメディアに対応する大学図書館での設備及び資料の充実について
- ⑧ 米国における日本コレクション(第4回日米大学図書館会議)

◆ 規 程 等

「北海道大学における書誌・所在情報の取扱いに関する要項」これは「北海道大学書誌・所在情報取扱いに関する申合せ」(昭和61年3月26日 第126回図書館委員会申合せ)を「要項」として定めたもので、「北海道大学図書取扱規程」(昭和32年7月24日 海大達第10号)に代わるものです。

北海道大学における書誌・所在情報の取扱いに関する要項

(趣 旨)

第1条 北海道大学(医療技術短期大学を含む、以下「本学」という。)の附属図書館及びその他の部局等図書室(以下「図書館等」という。)における図書館資料(以下「資料」という。)の書誌情報及び所在情報の取扱いについては、この要項によるものとする。

(定 義)

第2条 この要項において資料とは、本学に所蔵する次の各号に掲げるものをいう。

- 1 図 書
- 2 逐次刊行物(雑誌・紀要等)
- 3 視聴覚資料
- 4 その他の資料

(シ ス テ ム)

第3条 図書館等は、それぞれ受け入れた資料について、書誌情報及び所在情報を、北海道大学図書館オンラインシステム(以下「システム」という。)により作成するものとする。

(書 誌 情 報)

第4条 書誌情報の作成にあたっては、次の各号に掲げるところによるものとする。

- 1 書誌の記述については、和書は日本目録規則、洋書は英米目録規則に準拠し、学術情報センターの目録情報の基準を用いる。
- 2 分類については、デューイ十進分類法(水産学部は、日本十進分類法)を用いる。ただし、逐次刊行物については、分類を行わない。
- 3 書誌情報は、重複して作成しない。

(所 在 情 報)

第5条 所在情報の作成にあたっては、次の各号に掲げるところによるものとする。

- 1 一資料に対しては、一つの資料番号を与え、個別化する。
- 2 所在情報として、図書館等に配架するものは、配架室等の名称を、研究室等に配架するものは、研究室等の名称を与える。

(検 索 語)

第6条 書誌情報及び所在情報を検索する索引として、次の各号に掲げるものを検索語とする。

- 1 書 名
- 2 著 者
- 3 分 類 記 号
- 4 書名中の重要語
- 5 各種図書コード

(情 報 の 提 供)

第7条 この要項により作成した書誌情報及び所在情報の利用者への提供は、オンライン端末を使用したシステムによるものとする。

(雑 則)

第8条 この要項によるもののほか、資料の書誌情報及び所在情報の取扱いに関し必要な事項は附属図書館長が別に定める。

附 則

この要項は、平成元年4月19日から実施する。

○ 図書館委員会委員名簿

平成元年8月1日現在

部 局	官 職	氏 名	任 期	部 局	官 職	氏 名	任 期
	館 長	近 藤 潤 一	平成3.3.31	農 学 部	教 授	佐 久 間 敏 雄	平成3.3.31
	分 館 長	東 出 功	〃	獣 医 学 部	〃	斎 藤 昌 之	平成3.7.31
	事 務 局 長	青 柳 徹		水 産 学 部	〃	高 間 浩 蔵	平成2.4.30
	学 生 部 長	石 川 武	平成3.3.31	教 養 部	〃	金 沢 甫	平成3.3.31
文 学 部	教 授	青 柳 謙 二	平成2.3.31	〃	〃	中 井 英 基	平成2.3.31
教 育 学 部	〃	狩 野 陽	〃	言 語 文 化	〃	中 山 毅	平成3.3.31
法 学 部	〃	高 見 進	〃	環 境 科 学	〃	山 村 悦 夫	平成3.5.27
経 済 学 部	〃	石 坂 昭 雄	平成3.3.31	低 温 研	助 教 授	芦 田 正 明	平成3.3.31
理 学 部	〃	由 井 俊 三	〃	応 用 電 研	〃	日 合 文 雄	平成2.10.31
医 学 部	〃	大 里 外 響 郎	平成2.3.31	免 疫 研	教 授	柿 沼 光 明	平成2.3.31
附 属 病 院	〃	山 下 格	平成2.9.15	触 媒 セ	助 教 授	荒 又 明 子	〃
歯 学 部	〃	太 田 守	平成3.3.31	ス ラ プ 研	教 授	木 村 汎	平成3.3.31
薬 学 部	助 教 授	森 美 和 子	平成2.3.31	医 療 短 大	〃	和 氣 和 民	〃
工 学 部	教 授	嘉 数 侑 昇	平成2.5.31				

◆ 人事往来

○ 退 職

高 橋 ツ ル	(文学部図書掛)	元2.28
土 谷 里 香	(情報管理課受入掛)	元3.31
北 川 真己子	(情報サービス課閲覧掛)	〃
坂 口 千 夏	(〃 〃)	〃
代 田 優 子	(〃 教養分館閲覧掛)	〃
安 西 千 穂	(〃 〃)	〃
吉 川 依 里	(〃 〃)	〃
斎 藤 雅 子	(情報システム課学術情報掛)	〃
山 内 俊 子	(農学部畜産学科図書室)	〃
石 黒 チツ子	(教養部人文辞書資料室)	〃
宇 野 洋 子	(理学部図書掛)	元6.1
福 島 雅 子	(情報システム課学術情報掛)	元6.15

○ 採 用

相 馬 瑞 代	(情報管理課庶務掛)	元4.1
一之瀬 麻友美	(〃 教養分館情報管理掛)	〃
横 井 知 子	(情報サービス課資料サービス掛)	〃
石 黒 木 綿 子	(〃 教養分館情報サービス掛)	〃
松 井 美 夏	(〃 〃)	〃
石 丸 恵	(〃 〃)	〃
加 藤 ゆ か	(情報システム課学術情報掛)	〃
中 林 由 香	(農学部図書閲覧掛)	〃

○転任・配置換

高 砂 慶	弘前大学附属図書館情報サービス課長 (情報システム課図書館専門員)	元4. 1
平 田 忠 夫	北見工業大学附属図書館事務長 (情報サービス課課長補佐)	〃
羽 川 明	室蘭工業大学附属図書館学術情報係長 (情報管理課教養分館整理掛)	〃
若 菜 利 民	庶務部保健課課長補佐 (情報管理課課長補佐)	〃
久 原 秀 志	文学部庶務掛長 (情報管理課庶務掛長)	〃
柴 田 仁	農場会計掛 (情報管理課受入掛)	〃
加 徳 健 三	水産学部図書掛 (情報管理課教養分館整理掛)	〃
葛 西 壽 徳	情報管理課課長補佐 (農学部事務長補佐)	〃
岡 田 敏	情報管理課庶務掛長 (庶務部庶務課企画調査掛長)	〃
遠 昭 二	情報サービス課課長補佐 (情報システム課図書館専門員)	〃
秋 月 俊 幸	情報サービス課図書館専門員 (同参考調査掛)	〃
宇 野 弘 純	情報システム課 〃 (同情報処理掛長)	〃
藤 島 隆	〃 学術情報掛長 (低温科学研究所図書掛長)	〃
和 田 章 憲	〃 情報処理掛長 (工学部図書整理掛長)	〃
川 端 美 明	情報管理課図書受入掛 (情報サービス課閲覧掛)	〃
田 中 健太郎	〃 教養分館情報管理掛 (情報サービス課閲覧掛)	〃
畠 山 輝 敏	〃 〃 (同課目録掛)	〃
岡 内 鋭	情報サービス課資料サービス掛 (同課相互利用掛)	〃
高 橋 真寿美	〃 〃 (情報管理課庶務掛)	〃
田 中 美 鈴	情報管理課図書受入掛 (同課教養分館整理掛)	〃
櫻 庭 恒 彌	医学部図書整理掛長 (同図書閲覧掛長)	〃
田 中 一 郎	工学部図書整理掛長 (同図書閲覧掛長)	〃
庄 司 重 陽	〃 図書閲覧掛長 (医学部図書整理掛長)	〃
栞 原 蔚	医学部図書閲覧掛長 (室蘭工業大学附属図書館学術情報係長)	〃
武 井 好 一	低温科学研究所図書掛長 (小樽商科大学附属図書館整理係長)	〃
岡 田 潔	北見工業大学附属図書館運用係長 (水産学部図書掛)	〃
紙 屋 国 男	教育学部図書掛 (農学部図書整理掛)	〃
糸 畑 弘	医学部附属病院医事課 (〃 〃)	〃
佐 口 英 二	歯学部図書掛 (教育学部図書掛)	〃
吉 田 恭 子	経済学部図書掛 (医療技術短期大学部図書室)	〃
山 本 将 子	工学部図書整理掛 (獣医学部図書掛)	〃
船 木 俊 男	農学部図書整理掛 (工学部図書整理掛)	〃
町 田 由 紀 子	獣医学部図書掛 (経済学部図書掛)	〃
斎 藤 壽 美 子	医療技術短期大学部図書室 (歯学部図書掛)	〃
東 重 俊	医学部図書閲覧掛 (同学部図書整理掛)	〃
佐々木 光 子	〃 整理掛 (同学部図書閲覧掛)	〃
丹 野 揚 子	情報サービス課資料サービス掛 (歯学部口腔外科学第二講座)	元6. 1
小 峯 邦 夫	〃 相互利用掛 (旭川医科大学教務部図書課整理係)	〃
鈴 木 敬 二	情報システム課学術情報掛 (京都大学附属図書館情報管理課システム管理掛)	元8. 1

北海道大学附属図書館報「楡蔭」 (通巻78号)

平成元年 (1989年) 8月31日 発行 発行人 斎藤現太郎 (事務部長)

編集委員 宇野弘純 (図書館専門員)・岡田 敏 (庶務掛長)・山口國雄 (参考調査掛長)・和田章憲 (情報処理掛長)・菅原英一 (図書館: 目録情報掛)・小山千恵子 (文系: 教育学部)・坪田千江子 (理系: 環境科学)・関根正弘 (医系: 薬学部)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561